論評・エッセイ

大学の非政治化

―体験的平和論の立場から

丸　山　直　起
（PRIME 客員所員）

I

私は2017年３月末で非常勤講師を含むすべての教育活動を終えた。現役時代は国際平和研究所の一所員として同僚所員の刺激的な知見に接し、定年後も『PRIME』などに目を通すうちに、胸のなかのわだかまりが日を追うごとに確信に変ってきた。それは私たちが住んでいる世界、国にかかわるものである。世界はバラバラになってしまい、本来はさまざまなグローバルな問題に英知を結集するはずのレジームが機能を十分に果たせなくなってしまった。ヘイトや不寛容が地球上いたるところで噴出している。一方、わが国ではとくにここ数年ショービニズムが急速に広がっており、隣国に対する敵意があおられ、ヘイトが増殖し、富国強兵、国威発揚が公然と志向されている。私たちの社会は外見は21世紀らしい装いをまとっているが、その内実は急速に戦前の体制へリターンしている。あの暗黒の時代を思い起こさせるような法や制度がつぎつぎと復活している。驚いたのは、一国の首相夫人がある幼稚園児童の教育勅語の朗唱にいたく心動かされ、そこの学校の名誉校長を引き受けるという事件だった。時間が逆流したかと思ったが、これからの時代を暗示させるような事件であろう。土地払い下げばかり注目されているが、子どものうちから洗脳しようとする教育が現実におこなわれていることの異常さ、そしてわが子にこうした教育を受けさせようという親がいることへの驚き、こちらのほうがもっと深刻ではないか。

いずれも最近まで想像すらできなかったことばかりである。私の悪夢である ― ９条の改定による公然たる海外派兵・核保有 ― が現実味を帯びてきたようだ。以下に卑見を述べるので、皆さんのご批判をあおぎたい。

私は教員生活に終止符を打つと同時に、定年になってからつとめていた学校法人明治学院の評議員も退任した。評議員の仕事では明治学院の中・高・大学の現状を俯瞰的に把握することができ、いま大学全体が、明治学院が直面している課題が何かを理解したことで大変有意義だった。

いつのときだったか忘れたが、明治学院の教育理念が議題になった評議会で私は発言を求め、いま思い起こせばつぎのような趣旨のことを述べた。

私の知人のひとりが手紙で明治学院大学（以下明学と略）の教育について好意的なコメントを書いてきたことが、私の発言の動機であった。手紙は、明学は何とすばらしい教育をおこなっているのだろう、と実際に明学の教育が実を結んだ成果を手放しで褒め称えており、私にはいささか面はゆい内容だった。その知人は、安保法制などに反対し、国会議事堂周辺で抗議活動をおこなってい

たシールズという学生グループを取り上げ、そのなかに明学生が少なからず参加していた点を指摘し、明学には自由に思惟し学ぶ教育環境が整っているのだろうと賞賛している。

当日の評議会では、知人のこのコメントを披露し、さらに、シールズのメンバーのひとりは父親が牧師として、日頃からホームレスの人びとと接し、その支援活動にたずさわっており（これぞまさしくDo For Others)、こうした家庭環境で育った子が明学に進学するのはむしろ自然の流れではないかと述べた。さらに、教育の目的は、自立した人間を世に送り出すことで、他人の顔色をうかがうような人間を育てるようなことではないはず、とも言った。もちろん、知人も絶賛している明学教職員の日頃の努力の積み重ねが、自分で思考し行動する学生たちを育んだ教育の背景にあることは強調しておかなければならない。そして、こうした抗議行動に参加する学生の所属は明学やICU、聖心女子大などのキリスト教系大学に目立つ点があることも新しい潮流としてとくに付言しておいた。このことは明学の教育理念を語る場合に忘れてはならない重要な要素であると考えたからだった。

ここ20年くらいの間に小学校から大学まで教育環境がどんどん劣悪の一途をたどり、冒頭に述べたようなおかしな現象が現れているが、こうした現状を踏まえて、私なりの危機意識に基づいて発言したのだった。

評議会に出席していた理事や評議員に私の言葉がどれほど響いたかわからないが、あまり積極的な反応がなかったように思う。けれども閉会後何人かの方から、いいお話でしたと声をかけていただいたが、私はその場の空気から直感的に大学のなかでこの問題があまり関心を集めていないのではないかと驚いたほどだった。学生たちの行動を迷惑だと受け止めるような空気が大学全体に漂っているのでなければいいな、と感じた次第である。

私が大学で教えていた授業科目は国際政治学だから、安保法制や集団的自衛権などのテーマを扱うことが多い。国際政治学とはどうしたら平和な世の中になるかを追究していく学問だからだ。学生にカレントな問題を投げかけ、その関連でシールズの活動について意見を聞いてみると、彼らの多くは意外にというか、反応がネガティヴなのが気になった。同世代の若者が国会周辺で、黒いものを白と言いくるめて平然としている政権に対して異議申し立てしているにもかかわらず、まったく興味を示さないどころか、拒否反応すら認められるのはなぜだろうかと考え込んでしまった。

私が生まれたのは1942年１月。皇軍が破竹の勢いでアジア・太平洋地域を席巻していたときである。しかし、それも長続きせず、アメリカは緒戦の衝撃から素早く立ち直ると、反転攻勢に出て、兵站の伸びきった太平洋島嶼の日本軍拠点をつぎつぎと奪回し、あっという間に失地を回復してしまった。あとは周知の展開である。戦後入学した横浜市の小学校では校舎が足りず、早番（午前)、遅番（午後）の二部制授業がおこなわれていた。クラスには父親が未帰還の子どもも少なくなかった。街には「平和」の文字があふれ、私の学校の謄写版刷り学校新聞は「平和タイムス」と命名され、近くには平和病院やパチンコ「平和会館」、平和銀行など平和の名前のついた施設や店舗が出現し、平和交通などというタクシーも走っていたように記憶する。しかし、この「平和バブル」は長続きせず、「平和」は朝鮮半島で戦争が起こってから徐々に変質していった。

Ⅱ

1960年、70年の安保闘争の時期に大学、大学院に学び、学生時代は友人たちと喫茶店に入り浸り一杯のコーヒーで何時間もねばった。コーヒーがなくなると、水の入ったコップに砂糖を混ぜ、砂

糖水をこしらえた。またひそかに持ち込んだ小瓶のウィスキーで割ったりして天下国家やその折々の政治問題から人生論にいたるまで、ひたすら「議論すること」に大学生の存在理由を見出してきた世代にはまったく理解しがたい、荒涼たる砂漠のような風景が、いまの大学キャンパスには広がっているように思える。

私は最初の大学受験に失敗し、１年間予備校に通い浪人生活を送った。その年は日本国中が安保闘争の渦中にあった。社会党の浅沼委員長が刺殺されるという騒然とした世情のなか、予備校の現代文の講師は、「君たちは大学に入ろうとして一生懸命勉強しているが、君たちの学ぶはずの大学はなくなる。革命が起こるのだ。目ざすべきは大学でなく、国会なのだ」と授業そっちのけで、しかも国会の方角を手で指し示しつつ教壇の上からアジるほどのすさまじい雰囲気が予備校にまで及んでいた。この演説に刺激を受けたわけではないだろうが、都内のいくつかの予備校に通う学生の間に自発的に「全浪連（全国浪人学生連合）」という名称の団体が誕生し、淡いブルーの旗までこしらえて国会を目ざした。いま思い起こすと、当時の大学生も予備校生も労働組合も、すべてが政治的なものに否応なしに飲み込まれた時代だった。

しかし革命は起こらなかった。1961年４月苦労して入学した大学はもはや騒動のあとのけだるいような、満たされないような空気が支配的だったが、それでも安保闘争の余韻は大学内のいたるところで目についた。八畳間ほどもある巨大な立て看板や政治講演会への参加を呼びかけるビラの数々、昼休みに拡声器から流れる演説など。学生自治会主催の新入生歓迎会というのがあって、「松川事件」、「真昼の暗黒」、「戦艦ポチョムキン」などの映画が上映された。私の学部の自治会はダンスパーティにも熱心で、クリスマスが近づく頃になると、ダンスの講習会まで開催するほどだった。この当時、学部の１学年の学生は500人ほどだったが、このうち女子学生はわずか５、６人にすぎなかったから、自治会がダンスパーティに熱をいれるのも納得できた。

男子学生ばかり30人ほどの語学のクラスに分けられた私たちは、都内の女子大と合ハイ（合同ハイキング）をたびたびおこなった。当時はまことにおおらかで、ツテもなにもない私たちは女子大までタクシーで乗りつけ、正門の守衛に事情を説明して案内を頼みこむようなありさまだった。女子大側も心得たもので、私たちは学内の応接室に通された。しばらくすると、女子大生が数人姿を見せ、こちらの希望を聞き、しかるべき女子グループを紹介してくれた。

当日、新宿駅西口に集合して京王線に乗り込んだ私たち一行は、野猿峠というところへハイキングに行った。いま、大学セミナーハウスがあるあたりである。眺望の開けた頂上に座り、女子大生が作ってくれた弁当をほおばった。自治会室の謄写版で苦心して作成した歌集を見ながら、みんなで当時歌声喫茶で流行っていたロシア民謡などを歌い、フォークダンスに興じた記憶がいまでも鮮やかによみがえる。

さて、いま大学のキャンパスを歩いてみると、当時のノスタルジアをかき立ててくれるようなものはなにひとつ残っていない。

キャンパスの名物だった立て看板はもはや消えてなくなり、ビラが配られることもなくなった。たまに手渡されるビラを見ると、サークルや就職説明会の案内だった。大学入学当時大いに世話になった学生自治会はほとんどの大学で消滅した。難解な文章でつづられ、何度読んでも理解できなかった大学新聞も絶滅した。

要するに、キャンパスからは政治的なものがすべて消え去ってしまったのである。大学のキャンパスはどこも清潔で、あたかも大病院のようになってしまった。

どうしてこんなことになってしまったのだろう

か。

Ⅲ

私はここで、いまどきの大学生は・・・などと言うつもりはまったくない。むしろ彼らに同情的だ。非政治化してしまった現在の大学で政治的言説を見つけることがもはや不可能になっているからだ。

そして、この責任の一端は私にもあるのではないかと考えている。もう少し私の苦い体験についてふれることを許していただきたい。

大学教員として最初の赴任地であった、北海道の小規模な国立大学にいたときのこと。私は教授会で学生部の委員に選出された。70年の大学紛争が終息したとはいえ、当時はまだどこの大学も紛争に発展しそうな火種には事欠かなかった。そのため時間ばかりとられたうえ、学生の怨嗟の的になりかねない学生部の委員に選ばれるのを何とか回避したいような雰囲気が教員のなかにあった。要するに、学内の各種委員会のなかで、学生部はいわば「汚れ役」だったのだ。したがって、候補になりそうなのは、まず若くて、体力的にもなんとか耐えられそうな新人の教員であった。私は華奢で体力面ではまるで自信がなかったが、生意気に思われたのかどうか、学生部委員に選ばれた。

その大学の紛争の発火点になったのが、老朽化した学生寮と木造校舎の解体問題だった。だいぶ前に建てられた、これらの建物は傷みがひどく危険きわまりなかったので、大学としては取り壊し、そのあとに寮については全室個室の新寮を建設するというプランを学生側に提示した。しかし、学生たちは個室案を拒否し、大学側の勧告も無視して住み続けていた。個室化すると、寮生相互の人間関係が分断され希薄になってしまい、学生寮としての一体化が崩壊する、というのが学生たちの言い分だった。

この事態をさらに悪化させる事件が起こった。学生寮に空室がたくさんあったので、学生たち主体の寮委員会が女子学生の入寮を認めた。もともとの男子寮に女子を入居させるには寮規則を変更しなければならないし、女子トイレ、風呂などの設備も用意しなければならない。何よりも文部省の許可が必要だったが、文部省が男子寮に女子学生の入寮を認めるとはとうてい考えられなかった。したがって大学側は女子学生の入居を当然認めない。そこで紛争に発展した。学生部はとたんに多忙になった。文部省は老朽化して危ないから早く取り壊せと言うばかり。

学生たちは寮から少し離れ、長い間まったく使用されなかったため解体が予定されていた木造校舎を占拠した。

かくして大学側の退去勧告を無視して居座る学生を追い出し、いまにも朽ち果てそうな校舎を解体するという役回りが学生部に回ってきたのである。あの日の光景をいまでも鮮明に覚えている。

早朝、私は大学の腕章を付けて、ほかの学生委員、大学職員、さらに解体を請け負う工事関係者とともに校舎の正面に並んだ。やがて解体用の重機が到着すると、解体業者の親方が拡声器で「これから作業を始める。君たちが立ち退かないのであれば、怪我をしても知らんぞ」と校舎内に立てこもる学生に呼びかけたのを合図に、重機が鋼鉄の爪を正面玄関の屋根に振り下ろした。すでに脆くなっていた屋根はあっという間に崩れ始め、内部の学生たちはこれを見ると一斉に姿を消した。解体工事は1時間ほどで完了した。私たちはこの光景を身じろぎせず複雑な思いで見つめていた。

この事件のあとも散発的に学内デモがあったものの、大学構内は急速に静寂を取り戻した。大学の一員として動員され学生たちと対峙した私は、彼らからすれば「大学・文部省権力の走狗」であった。その後立てこもった学生からは怒りのこもった視線を常に感じたものである。キャンパス

が静かになり、連日続いていた会議から解放され、ようやく研究に専念できると考えている自分を発見し、愕然とすることがあった。おそらく多くの大学教員もまた私と同じ心境であっただろう。

たしかに大学が教育・研究の場にふさわしい環境を維持することは大切だが、大学の対応は、一方で学生たちが身につけている政治性という貴重な素質を摘み取ってしまいかねない問題をはらんでいることにこのときの経験から学ぶことになった。

Ⅳ

現在、各大学では「授業評価」を毎学期ごとに実施している。学期の終りに用紙を配布し、受講生に記入してもらい、回収すると、しばらくしてその結果が各担当教員のもとに郵送される。

あるとき、送られてきた集計結果を見て「この授業からは愛国心が感じられない」との学生のコメントが記載されているのには驚いた。もちろん私は愛国心を高揚させるために授業をしているのではない。沖縄問題、原爆・原発、安保法制、憲法、ヘイトスピーチ、クライムなどを意識的に取り上げ、参考書に中沢啓治『はだしのゲン』をあげて愛国教育とはおよそほど遠い授業をおこなってきた。受講生のなかに私とまったく正反対の考えをもつ学生がいることも当然想定している。反論や異見を表明する機会はもちろん与えられている。事実を曲げることはもとより許されるべきでないが、そう遠くない将来に、おそらく起こりうる事態に注意を喚起し、警鐘を鳴らし、問題の本質・背景をわかりやすく講義することを私の教員としての責務としてきた。残念だが、政府の言っていることはまず信用できない。本土の政府・国民による沖縄に対する陰湿で執拗なイジメ・差別、それに国民の関心の低さについてもたびたび言及した。これこそ本土側の暴力、構造的暴力にほかならないからである。また、私はいまのオリンピックにも反対であるという立場を授業でも述べた。このことも「反愛国的授業」と見られたことの一因かもしれない。たかが「国際的運動会」ごときに巨費を投じる愚かさも理由のひとつだが、本来は都市が主催となるはずの五輪が国家主義をあおり動員する場になっていることへの反対で、国旗掲揚とか国歌斉唱はやめるべきだと考えているから。日本の五輪でなく、東京五輪なのだから。

しかし、その一方、特定の見解を述べると、それを押しつけと受けとめ、嫌う学生が増えていることは認識しており、ここ15年くらいであろうか、学生が世の中の政治問題に関心をなくしているのではないかと気になっていた。受講生に意見を求めても、反応が鈍いと思うことが多くなった。

しばらく前に若者、大学生の保守化が話題になり、そのときは、学生の生活状態が好転し、就職率も上向いてきたことが原因であるというような見解が一般的に多かったようだ。たしかにそういう側面もあるだろうが、不況になれば革新的になるというものでもないだろうから、主たる原因は前述したキャンパスの非政治化にあるのではないかと考えられる。つまり、大学内で政治的テーマを公然と話題にし、議論するような雰囲気が失われたことの結果ではないだろうか。大学紛争の再燃を恐れるあまり、その可能性をはらむような芽をすべて摘み取った結果がこのような事態を招くにいたったのではないか。しかも、大学の現在の状況の背景には政治的なものを忌避するような日本全体を包み込んでいる重苦しい空気が反映されているのではないだろうか。

私が大学生・院生の時代には、ほとんど毎日キャンパスのどこかでさまざまな講師を外部から招く講演会が開催されていた。革マル派のイデオローグであった黒田寛一、中核派の北小路敏、評論家の羽仁五郎などとともに、大日本愛国党の赤

尾敏など主義主張もまったく正反対の多彩な人物が多くの学生団体に招かれ、私たち学生は大いに刺激を受けたものである。いずれもマスメディアなどにはまず登場することはないひとびとの「ナマ」の話が聞けるわけだから、興奮しないわけがない。学生団体だけでなく、大学もまた政・財界、文学者から芸能人にいたるまでさまざまなゲストを呼んで講演会を催すことに熱心だった。早稲田の大隈講堂でおこなわれた童話作家の小川未明を記念する講演会には、作家の尾崎士郎、児童文学の坪田譲治、それに慶応の小泉信三など夢のような顔ぶれが一堂に揃い、聴講に詰めかけた学生は大感激したのだった。国内にとどまらず、海外からも多くの文学者、哲学者、国家のリーダーなどを招聘して記念講演をおこなうことがあって、学生は大いに知的刺激を受けたものである。

もちろん現在でも各大学は教育の一環としてこうした贅沢な外部講師による講演の機会を設けているが、まさか左翼や右翼の大物を招くわけにはいかないだろう。その点、学生団体が招いた講演者は独自の視点から厳選されただけに、いずれも非常にユニークで魅力ある人物であって、そのぶん大いに堪能できた。

文部省（現・文部科学省）の締め付けと大学、学生双方の側の萎縮によって、こうした貴重な機会がめっきり少なくなったのであれば、残念きわまりない。日本の社会が極めて窮屈になったように、大学もまた同様の閉塞状態にあるように思え、結果的に大学の活力の喪失につながらないかと心配だ。

さらに気がかりなことがある。すでに指摘されていることだが、若者の活字離れである。こちらのほうがもっと重大で、いまの学生の多くは新聞も本も読まなくなっているのではないだろうか。授業で使用する専門書はともかく、小説を読まなくなった。私はそれぞれの大学出身の作家の著作くらいは目を通していてほしいと願って、明学では藤村の『桜の実の熟する時』を学生に奨めることにしていた。薄い本だから一晩もすれば読了できると考えたからだが、学生からは旧式の字体だから読みにくいと苦情が出た。『人生劇場』を読んだことのない早稲田の学生が多かったこと、作者の尾崎士郎の名前すら聞いたことのない学生がいたことにもびっくりした。北海道の国立大学で教えていたときは、伊藤整『若い詩人の肖像』を推薦した。いずれの書物も、それぞれの学び舎について書かれたものだったから、これらの作品にふれれば、自分が学ぶ大学に対する愛着が一層増すだろうという親心からだったが、あまり効き目がなかったようである。

活字離れは文章力にも影響する。試験の答案を採点していて、「紛争」を「粉争」と書く誤字や脱字はまあ仕方がないが、何度も読み返さないと意味がわからない文章に出あうことがある。文章力は読書量に比例するから、活字離れが進めば、文章の稚拙さがどんどん拡大していくのは当然の流れだろう。

V

こうした状況が続けば、大学、いや日本はどうなるのだろうか。

憲法は結局改定されるのであろうか。この予想がはずれることを願うが、事態はかなり悲観的である。理由は簡単で、日本人の人口比と投票行動にある。つまり若年層に自民党支持が多く、高齢者になるにつれ自民離れが顕著になっていることが各種世論調査の結果、明らかになっている。これまでは若いときには進歩的、革新的であったものが、年齢を重ねるにつれ保守的になる、と言われてきたが、まったく逆の傾向がますます明白になってきたのだ。若い世代の間には現政権が志向する思想・歴史観に共鳴する層が増えているように思われる。日本人の高齢化が進み、戦争を知る

世代はますます少なくなっている。戦争を体験しない世代は戦争を観念的・情緒的にとらえるのだろうか。安保の時代に学生生活を送り、雑誌『世界』『朝日ジャーナル』に親しんで育った世代は憲法９条の最後の砦であったが、これがもう陥落寸前になっている。

2017年は初めて18歳人口に選挙権行使が認められた総選挙がおこなわれた年で、世論調査によると18、19、20歳台の選挙民の40％からほぼ半数近くが自民党に投票している。これではもう結果は目に見えているのではないか。

数年前、私は私の住む町内の何人かの知人と「憲法を読む会」というのを立ち上げ、いまの憲法を音読し、自民党草案と比較し論評するという会合を毎月1回開催したことがあった。参加者はすべて高齢者で、若い世代の参加はなかったが、ある80歳をだいぶ越えた婦人は、参加の動機をつぎのように語っていたのが印象的だった。

「私はこれまで一度も憲法を読んだこともなければ、手にとったこともない。憲法にふれることなく、このままあの世に行ってしまうかと考えると居ても立っても居られない」

大学の教員になりたてのころ、授業のテキストに使用したのは、宮田光雄『非武装国民抵抗の思想』（岩波新書）である。私の理想に合致するからというのが採用の理由だった。この本を読んだ学生から、「すごい本ですね」「人生観が変るほどのショックを受けました」といった感想が相次いだ。

非武装というのは丸腰で何もしないでいればいいというものではない。外交力を駆使しあらゆる問題に対処しなければならないから、武装するよりもはるかに大変である。非武装であるからには、外国の軍隊が攻めてきたら当然占領されることになる。なまじ武装していて応戦すれば、途方もない犠牲を覚悟しなければならぬ。さて、ここからが正念場である。宮田流に言えば、非武装の前提となる外交的・平和的な努力がことごとく失敗し、その結果占領される事態にいたったとしても占領者に対して非暴力・不服従を貫くことで抵抗するのだ。占領軍に対して非暴力の抵抗に徹する。

武器をとって抵抗すれば、戦う本人はもちろんのこと、武器をとらない市民も一緒に犠牲になることは過去の歴史が教えてくれる。ナチスは親衛隊のひとりでも殺されれば、見せしめのために殺害現場近くで無作為に拘束した市民数十人を処刑した。村落全体を破壊することもあった。この種の報復行為は万国共通で、日本軍も米軍もおこなってきた。しかも、この狭い島国では他に逃げようがない。ナチス・ドイツの占領地域で見られた非暴力・不服従のレジスタンス。そのためには国民の崇高な意識改革が必要となる。国民の主体的平和への意志を育てるため教育をこの方向に徹底させていかねばならないし、同時に平和外交を展開し外交的・平和的な方策を国民こぞって必死に考え、国外に向けてもこの平和の精神を発信していかなくてはならない。安易に軍事力に頼り、増強していくのとは異なって、大変な努力、構想力が求められる。要するに紛争にいたった場合、武装しておれば、人は常にその軍事力を使いたくなる誘惑に駆られ、平和的な解決方法を試みるなど人智を尽くさず、最後には力にモノをいわせようということになるだろう。非武装であれば、あらゆる知恵をしぼって、戦争を回避するには問題をどう解決したらいいか必死になって模索するだろう。谷川俊太郎に、「子どもは喧嘩はするが、戦争はしない。するのは大人だ。大人は国のためとか、国民の命を守るためとかの口実で戦争をする」という内容の有名な詩があった。

戦後70年以上が経過すると、かつてカービン銃で武装した警察予備隊が現在は空母まで保有する堂々たる軍隊に生まれかわっている。予算から装備にいたるまで世界の大国と肩を並べるほどの軍事国家に成長し、さらに巨費を軍備に投じようと

しているのに、国民側の反応は非常に弱い。これでは軍の発言力・影響力が高まるのは必然であろう。最近の事件が象徴的に物語っているように、70年間に積み重ねられた実績はもはやシビリアンコントロールなどとうてい及ばない存在になったことをあらためて実感する。一連の不祥事のあとTVの会見に出てきた顔ぶれを見ていると、制服組が臆することなく堂々としているのとは対照的に、何を恐れているのか文民のほうが遠慮し萎縮してしまっている。ヘリがよく墜落する沖縄の米軍司令官はその都度謝罪に県庁を訪れるものの、「こんなことでなぜ大騒ぎするんだ」と言わんばかりの表情で応対しているのが印象に残る。だが、軍隊とはそもそもそういうものなのだろう。

そして世界でも有数の軍事力を保有するまでに巨大化した、わが自衛隊はこれからどうなるのだろうか。

日本はアメリカから見ると、西部劇映画に出てくる保安官助手だと言われることがあるそうだ。保安官はもちろんアメリカで、保安官助手の日本は保安官のもとでどんな任務につくのだろうか。映画で保安官が、「おれを掩護しろ」と叫んで酒場に突入する、あるいは「おれは正面から行くから、お前は裏へ回れ」という場面である。要するに、日本の重要な役回りは正保安官のアメリカを掩護することにある。こう見ると、政府が急いだ集団的自衛権行使の容認は腑に落ちる。そして憲法９条改定を急がねばならない理由もよくわかる。地上イージスなどの、ため息の出るような巨額の迎撃システムを配備するのも、高額の兵器を言われるままに購入するのも、横田空域もすべて理解できよう。米大陸を狙ったミサイルは日本の上空を通過するから、日本はアメリカを掩護するためこれを打ち落とさなければならない。さて、そのあとの展開はどうなるか。日本は参戦したと見なされ、紛争の当事国となる。これが集団的自衛権の本質である。

結局のところ、憲法が改定され、だいぶたってから投票に行って早まった決断をしたと悔やむのはいま目の前にいる若者なのだ。

私の世代だと、家族や親類のなかに先の戦争の犠牲者が必ずひとりやふたりはいるはずである。前述したように、私が通っていた横浜市の小学校のクラスには、いわゆる母子家庭の子が少なくなかった。

先年、母が亡くなって遺品を整理していたら、私が生まれたとき中国大陸の戦地に派遣されていた父との間に交わされた検閲済みの葉書が一束出てきた。几帳面であった父の性格を反映して細かい文字でびっしりと書かれた内容を読むと、出産を控えた母への愛情あふれる気遣いや村の誰それの消息などがつづられている。ノモンハンまで行った父は幸いにして生還し敗戦を内地で迎えるが、母の弟はフィリピンで戦死している。

フィリピンは太平洋戦争最大の激戦地で軍人全体の戦死者230万のうち50万人以上がこの地で命を落とした。昭和19年12月、叔父は戦場にたどり着かないうちに、セブ島沖で輸送船が撃沈され、死んだものと思われる。22歳だった。20年以上もたって、叔父の母、つまり私の祖母に靖国神社から合祀の通知があり、大学生だった私は長野の田舎から上京した祖母に付き添って生まれて初めて靖国を訪れた。祖母は息子が戦死した証明とも言える、合祀したという書き付け、それに盃などを受け取ったが、ただ一人残った男の子を失い悲嘆にくれていた長い戦後の苦悩にようやく一区切りついたようであった。

母が遺したアルバムに家族の集合写真がある。その一枚は、昭和17年４月、母の実家の家族全員の記念写真で、出征前の叔父を含め全員笑顔もなく無表情なのが印象的である。私は祖母に抱かれている。戦地に赴けばふたたび生還し故郷の土を踏めるかどうかわからないから、せめて最後の団欒の思い出を家族とともに記録にとどめておこう

としたのである。ほかにも叔父に抱かれた私の写真が残っており、だいぶ可愛がってもらったのであろう。私は叔父のことを「兵隊おじさん」と呼んでいたそうだが、その叔父についての記憶はまったくない。二枚目は昭和19年５月にやはり母の実家で撮影し、戦地から帰国した父の姿はあるが、前年の５月に召集された叔父はここにはいない。

出征する兵士の家庭はどこでも同じように家族全員の写真をとり、兵士はその一枚を大切に肌身離さずして戦場に赴くものなのだろう。私は靖国を訪れてから、戦局もほぼ決した時期に赤紙が来て、まず生きて帰還することが難しい南方派遣が決まったときの心境はどうであったろうか、叔父には思いを寄せる女性がいただろうかと考えたことがあった。

父も叔父も、子どものころは、まさか戦争になって実際に戦地に送られるだろうとは夢にも思っていなかったに違いない。だが、実際に戦争になってしまった。嘆いてももはや手遅れであった。日の丸と軍歌と万歳で見送られた以上、じたばたしても始まらない。個人より家名が重んじられる時代、逃げ隠れするわけにもいかぬ。そのようなことをすれば、残された者は非国民の家族として罵られ、蔑まれ、あらゆる罵詈雑言にひたすら耐え忍ぶしかない。だから、あきらめて覚悟を決めるしかない。いずれ同じ立場に置かれたとき、いまの日本人もその覚悟をするのだろうか。

Ⅵ

では、どうすればいいのだろうか。

大学キャンパスの非政治化こそ、今日大学全体が活力を失っている最大の原因であろう。いまのキャンパスから政治的言説が消えて久しいが、それがむしろ日常的になってしまい、こうした状況に多くのひとびとが慣らされ、気がついたら、いつの間にかこんな病院のようなキャンパスになってしまった。

この国の行く末に警鐘を鳴らしていた高齢者がつぎつぎと亡くなり、あの昭和の暗黒の時代を語るひとびとがいなくなると、戦争の記憶も同時に遠ざかっていく。

戦後、日本よりもはるかに厳しい法体系を整備・導入してナチズムと決別したはずのドイツでさえ、近年ネオナチの台頭が顕著になり、人種差別主義がどんどん拡大している。ヨーロッパのほとんどの国でも同様の傾向が認められる。選挙のたびに移民・難民排斥を訴える政党が得票の上位を占める。

油断をすればすぐ元に戻ってしまう。加害者が忘れようとしても、被害を蒙った側は被害の記憶を永遠に記録することに努めるだろう。中国、朝鮮半島など東アジアの人びと、ユダヤ人などは歴史の記憶を次世代につないでいくための努力をそれこそ国をあげておこなっている。民族虐殺の追悼記念館や記念碑、銅像などの建立である。そうしないと記憶は風化し、やがてアウシュヴィッツも、ヒロシマ・ナガサキも、南京も忘却の彼方に消えてしまい、第二、第三のホロコースト、ジェノサイドが生じるかもしれないからだ。

先にあげた宮田光雄氏の著書のなかでとくに衝撃を受けるのは、広島、長崎の小・中学生を対象とした1968年、70年の原爆に関する調査の結果であろう。

世界ではじめて原爆を投下された国が日本であることを知らない中学１年生が広島で８％、長崎20％、広島に投下された日を正確に答えられなかった広島の小学生35％、中学１年生27％、中学３年生14％と情けなくて泣きたくなるような数字が並ぶ。そもそも投下された都市を「広島・長崎」と正しく答えられなかった長崎の小学生20％、中学１年生14％、中学３年生5％で、しかも周辺の被爆しなかった学校ほど、この完全な解答数は低

下し、中学３年生でも佐世保、大阪、山口など他都市の名前まであげる生徒がいたという。（169～170ページ）

この状況は時間がたてばたつほど悪化する。2011年に広島平和教育研究所が県内小中学生を対象に実施した調査によると、広島への原爆投下日時を尋ねる質問への正答率は42.3％で、1987年の調査と比べ約20ポイント低下したとある（『東京新聞』2018年７月22日）。被爆県でさえこうした実情だから、他県の状況は推して知るべし。唯一の被爆国でありながら、核廃絶の先頭に決して立とうとしない国の姿勢がこうした風化作用を助長していることは明らかだろう。日本政府に核廃絶の旗振りをする気がまったくなければ、いったいどこの国が代わりをつとめるのだろうか。

かつて私が滞在したイスラエルでは、「ホロコースト追悼の日」というのが定められている。その日の朝、国中に一斉にサイレンが鳴り渡り、市民は犠牲者に黙祷する。歩行者は立ち止まり、交通機関はストップし、運転者はその場で車を停め、乗客もおりて、車の傍らで頭を垂れる。終了を告げるサイレンが鳴ると、ふたたび街や道路には活気が戻る。この光景に出くわしたことがあった。70年間イスラエルはこの行事を毎年おこない、国民もこれを厳粛に守っている。600万のユダヤ人が犠牲になったホロコーストの悲劇を二度と繰り返さないための運動を国際的に展開するには、まず自国から始めなければならない。

先の『東京新聞』記事によれば、広島市は公立小・中学校で８月６日登校日を復活することにしたそうだ。だが、原爆犠牲者慰霊を被爆した二県だけに限ってよいものだろうか。戦後明らかになった資料では、京都、新潟などの都市も原爆投下の候補地にあがっていた。もし核廃絶実現を本当に望み、世界に訴えようとする気があるのなら、イスラエルのように全国でサイレンを鳴らし、国民は黙祷するくらいのことはすべきなのではないか。

この70年以上の間、私たちは学校でいったい何を学んできたのだろうか。

私たちが近・現代の歴史から目をそむけ、政治問題に関心をなくすと、どうなるか。

いま世界で起きているさまざまな問題に関心をもつこともないだろう。他者の痛みを共有し、弱者・少数者を思いやる心もなくなるに違いない。アフリカをはじめとする途上国の飢餓・貧困、シリアなどから逃れる難民の受け入れを拒否するヨーロッパの国や国民、日本でも増加の一途をたどる少数者に対する差別・迫害・イジメ、ヘイトスピーチ、クライム、そして原発の輸出による核の拡散など。これらはすべて、現在、私たちが住んでいるこの地球や身の回りで起きていることなのだ。

けれども、あきらめるわけにはいかない。今後70年かけて元に戻すことがいかに困難で、気の遠くなるような作業であるからとはいえ、まったく不可能なことではないからだ。

そのためには（70年かけて、たとえばいまの軍隊をなくしていくためには）、まず、私たちが覚悟を決めよう。非国民とどんなにののしられようと、現役の教員はまっとうな真実を伝え、日々の授業に自らの心情を愚直なまでに語り続けることだろう。こうすることで大学にはふたたび活力がみなぎるようになるだろう。

最後に、イスラエル・ヘブライ大学のホロコースト研究の大家イェフダ・バウエル教授がドイツ連邦議会で記念講演をおこなったときのことを紹介したい。

バウエル教授は、ソ連軍がアウシュヴィッツを解放してから53年後の記念日にあたる1998年１月27日に連邦議会で列席する大統領、首相などを前にホロコーストについて講演した。教授はナチスの罪業を容赦なく断罪しつつも、同時にホロコースト以後も同種の虐殺が跡を絶たないと指摘す

る。ナチスを一方的に非難するだけでは実際に起きたことからの安易な「逃避」にすぎないとして、むしろ加害者であったドイツ人と被害を受けたユダヤ人がともに協力して記憶の風化の流れを押しとどめるための努力をしていかなければ、これからも第二、第三のアウシュヴィッツが発生し、新たなヒトラーが登場することになろうと語る。

私が感心したのは、ドイツの指導者をはじめ国民がホロコーストの犠牲者をいわば代表する一ユダヤ人学者を招いて耳の痛い厳しい叱責と批判の声に謙虚に耳を傾けたことであった。この点に、戦後のドイツが過去の歴史と真剣に向きあってきた姿勢と国家、国民の成熟度を知って羨ましく思ったのである。敗戦後のドイツは重い十字架を背負ってきた。周辺諸国との和解はもちろんのこと、ユダヤ人への賠償、非ナチ化に全力で取り組んだ。イスラエルに対しては信頼の構築に懸命に努めた。1970年にブラント西独首相はワルシャワ・ゲットーの記念碑前でひざまずき頭を垂れ、73年には首相としてはじめてイスラエルを訪問、ホロコーストの追悼記念館で犠牲者に黙祷した。メルケル首相もまた2008年イスラエルの国会で演説し、謝罪と反省の言葉を述べた。このような姿勢は教育現場でも徹底している。そして、こうした地道で誠実な努力がイスラエル人の心をつかみ、両国は現在最も良好な関係にある。

同じ敗戦国の日本と何と大きな違いだろう。日本人はドイツが歩んできた「イバラ」の戦後史を学ばなければならなかった。その果てに訪れる平和な未来の可能性を信じなければならなかったのだ。歴史を直視することをひたすら拒み、それゆえにいつまでたっても近隣のひとびとと心の通い合う交流を築くことができないでいる日本の為政者、国民との決定的な違いがそこにある。